

## イスパニア会会報

### 目次

会長挨拶  
活動報告  
恩師の先生から

現在のイスパニア学科  
海外生活  
海外便り  
卒業してから  
近況報告  
理事名簿

原稿執筆要項  
編集後記

西川 喬  
竹谷 和之  
鼓 直  
木村 榮一  
野村 竜仁  
谷 善三  
岡崎 由紀子  
柴野 元秀  
36名  
イスパニア会理事会

会報編集委員会  
会報委員

## 会長挨拶

西川 喬

1969年（昭和44年）卒

イスパニア会の会報第1号が出来上がった。イスパニア会は神戸市外国語大学の同窓会である楠ヶ丘会の下部組織だから、その枠内で活動するのは当然だが、特にイスパニア学科の卒業生の親睦を目的にしている。今まで何度も理事会が開かれて、大きな記念パーティと総会は開いたが、なかなか親睦のための具体的な活動はできなかった。理事の方々がまだ多忙をきわめる現役だということもあって、時間を割けなかったのが理由のひとつだった。最近になって、退職したとか、ようやく子育てが終わったとかで、少し時間の余裕ができたので活動に手を貸します、とっていただける人が出てきた。歴史を経るというのは、こういう変化をいうのかもしれない。

神戸市外国語大学にイスパニア学科が誕生したのは昭和37年（1962年）のことである。第1期生は30余名。まだ学舎が灘区の六甲にあった頃である。地獄坂と呼ばれた急な坂道を200メートルほど上ると、そこに正門がある。4月の入学式の頃は、その道の両側に見事な桜が咲いて、とても美しかった。正門の階段をさらに上がってから振り返ると、神戸港が一望できて、天気の良い日には海が輝いて見えたものだ。校舎は戦前からある古いものだったが、この眺望だけは自慢できると、六甲時代の卒業生は口をそろえる。

昭和40年（1965年）に、イスパニア学科は4年生までの全学年の学生がそろった。私は、その年に1年生として入学した。上級生からは、君らは恵まれた世代だなどよく言われたが、理由を訊ねてみると、辞書も教科書も参考書も一通り揃っているからだという話だった。私たちは高校時代の英語から考えて、それが当たり前だと受けとめていたが、1期生にとってそれが垂涎の的だというのが驚きだった。しかし、ずっと後になって、日本におけるスペイン語教育史などを紐解くにつれて、「当たり前」になるために、どれほど先人たちが労苦と困難を乗り越えなければならなかったか、思い知ることになる。

例えば辞書に関して言えば、ずいぶん長い間、ある意味では戦後もずっと後になるまでスペイン語学習者は不便をかこっていたと言える。西和辞典そのものが存在しなかった明治時代、学生たちがどのような辞書を使っていたかと言えば、想像するに多分西英辞典と英和辞典を使い、学習が進んだところで西西辞典を使用していたと思われる。想像すると言ったが、これはもう間違いのな

いことだろう。大正 5 年（1916 年）に日本人による最初の西和辞典が出るが、その序文に東京外国語学校のスペイン人教師エスパダ氏が次のような賛辞を寄せている。「学生諸君は、今からそして初めて、中間の辞書を引く煩わしい方法から解放されるであろう」。それまでのスペイン語を学ぶ学生たちが西英辞典を引き、次に英和辞典を使っていたことを示唆するものである。昭和 2 年（1927 年）に「村岡西和辞典」と呼ばれ、戦後も長く使われ続けた辞典が出るのだが、学生たちにとって事情はそれほど好転しなかった。この辞典も、実際の語の使い方まで手が回らず（例文などほとんどない）、語義や慣用句もそう多くはのせられていなかった。スペイン語を専攻した学生たちは、結局西英辞典そして次に英和辞典を引かなければならなかったと、お教えいただいた林一郎先生が、ご自分の学生時代をふりかえって嘆息まじりにつぶやいたのが、つい最近のことのように思い出される。

時が流れて、西和辞典や和西辞典も数多く出版され、電子辞典のような便利なものも使えるようになって久しい。スペインに行かなければ手に入れることが出来なかった資料も、今はインターネットで入手できる。スペインやラテンアメリカに旅行するのは、それほどむずかしいことではない。第 1 期生がスペイン語を学んだ時代、学生は船でインド洋を渡り、スエズ運河を通って、40 日以上かけてスペインに向かった。そうした学生たちからすれば、今はまるで夢のような世界だろう。激しい時代の変化を思わずにはいられない。

スペイン語圏を中心に、世界で活躍する神戸市外国語大学イスパニア学科の卒業生は、少なくない。会社から派遣された人、自ら望んで通訳として働いている者、海外の大学で教えている人など、実にさまざまな方々が海外に居られる。そのような広がりや、神戸市外大イスパニア学科という絆で結びつきたい、という願いもこのイスパニア会設立の動機の一つになっている。この会報がそうしたことに少しでも貢献できたら、まさしく望外の喜びであると言えよう。

## 「イスパニア会」設立経緯および活動報告

イスパニア会理事長 竹谷 和之  
1979年（昭和54年）卒

2000年12月、「イスパニア会」設立準備委員会を神戸市外国語大学内に設置し、主として外大勤務の教職員（木村榮一先生中心に）で議論を進めてきました。

そして、2001年6月3日楠ヶ丘会総会（三木記念会館）において「イスパニア会」が承認され、楠ヶ丘会同窓会として活動を開始しました。その後、少なくとも年1回の常任理事会および理事会でイスパニア会開催に向けて準備を進めました。

2005年11月26日ホテル・オークラ神戸（松風の間）において、イスパニア会第1回総会が開催されました。総会は楠ヶ丘会須藤淳会長（当時）にご出席いただき、まず報告事項として、西川喬会長からイスパニア会設立経緯の説明がありました。その後の審議事項では会則、役員および運営方法について審議され、全会一致で承認されました。

総会の後、当時の東谷頼人前学長、木村榮一学長をはじめイスパニア学科の先生方、非常勤講師の先生方など10名の来賓をお招きして記念パーティを開催しました。記念パーティは、イスパニア会設立祝、東谷前学長退職祝および木村学長就任祝のパーティとなりました。総会とこの記念パーティには、一期生から昨年度卒業生を含め総勢200名の卒業生が参加しました。関西はもちろんのこと九州や関東から出席した人もいて、卒業式以来会っていなかったり、数十年ぶりに再会したりして昔話に花が咲いていました。そして恩師の先生方と話をしたい人たちは長い行列をつくっていました。

当日は3つの記念パーティを同時に開催することになりましたので、時間が足りなくなるのではという心配がありました。しかしスピーチされる方々のご協力により、2時間の記念パーティは盛況のうちに無事終了しました。

総会と記念パーティは、会長はじめ理事であるイスパニア学科卒業生の皆様の献身的なご協力により開催することができました。

2012（平成24）年6月2日ホテル・オークラ神戸（平安の間）において、イスパニア会第2回総会及び記念パーティが開催されました。

総会は、まず西川喬副会長より、東日本大震災によって総会が1年延期になった経緯について説明がありました。その後、事業報告及び収支決算報告がなされ、審議事項では会則改正、役員改正について審議され、全会一致で承認されました。

総会の後、木村榮一前学長、西川喬先生をはじめイスパニア学科の先生方、非常勤講師の先生方など7名の来賓をお招きして記念パーティを開催しました。記念パーティは、木村前学長および西川先生退職祝のパーティとなりました。総会とこの記念パーティには、一期生から昨年度卒業生を含め総勢120名の卒業生が参加しました。

2時間のパーティは、神戸外大フランメンコクラブによる華麗な舞踊も披露され、盛況のうちに無事終了しました。

総会は5年に一度開催という計画ですが、諸般の事情により不定期になっています。今後、同窓会の皆さまの積極的なご支援、ご参加をお待ちしています。

## 恩師の先生から

### ペルーの前衛詩人を巡って

鼓 直

(1962年～1969年)

長年、スペイン語圏の小説、それも主としてラテンアメリカの小説の紹介に携わってきましたが、寄る年波で何とやら、肝心の知力や気力や体力などが衰えて、翻訳の仕事も一向に捗らなくなりましたので、実はこの数年は、かねて買い込んだ諸国の詩集をひもといて、乞われるままに、(低声で)朗読を試みたり、(出来るだけ)短い文章を寄せたりしながら日を送っています。

しかし、正直に告白しますが、それがカバーする分野はきわめて限定されています。なぜならば、私の目下の関心は、1920年代以降の、シュルレアリスムを核とする前衛詩にあるからです。

例えば、ペルーの詩人カルロス・オケンド・デ・アマー(1905—36)は、私がかつとも気に掛けている前衛派の一人です。詳細この上ない伝記の筆者ホセ・L・アヤラによれば、詩人の父親のカルロス・B・オケンド・アルバレスはパリのソルボンヌで医学を修め、帰国後はチチカカ湖畔のプノ市(ペルーで最多の詩人を輩出している土地)で開業すると同時に、印刷所を設けるという典型的な地方文化人でした。伯父のニコラスもまた1900年、映画館を開くという同種の人物でありました。

こうした恵まれた環境の中で、詩人は友人らを誘って同人誌『セルロイド』を企画しますが、この幼いもくろみは残念ながら挫折しました。ただし、申すまでもなく新来の第七芸術、映画と関連した誌名は、この早世を運命づけられた詩人が遺すことになった、唯一の詩集『5メートルの詩』の題名に反映しております。

やがて、この早熟の詩人は中等教育を受けるためにリマに移りますが、それから間もない18歳の時に、相次いで両親を失いました。自立を強いられませんが、「詩人は働くべからず」というその信条に忠実に、もっぱら、プノ県の各地に住む親類をたずね歩く寄食生活を送りました、暫くのことでしたけれど。

そうこうする内に、ペルー社会党の創立者であり、有名な文化雑誌『アマウタ』の主宰者であるホセ・C・マリアテギの知遇を得、マグダ・ポルタルのような有能な女性詩人を含むグループとも接触して、同人誌やシリーズ形式の詩

集を刊行するなど、活発に動き始めました。上で言及した唯一の詩集を世に出したのもこの時期（28年）のことです。ただ、収録作品はいずれも、十代後半から二十代前半に物されたものです。詩人はその後の、長くない時間の大半を社会的・政治的闘争についやすこととなります。

この現実的な活動は、まず、社会主義を扶植するための教育の方面に向けられました。そしてその最中に、後年のチェ・ゲバラではないけれど、後進的なボリビアを訪れます。しかし、そこで過激な右派批判を行ったために、一月余の留置と追放の憂き目に遭います。さらにアルゼンチンへの潜入を試みますが、書類の不備を口実に入国を拒否されました。

止むなくペルーに戻りましたが、30年代の国内状況は最悪で、詩人はまたもや逮捕、拘置、死刑宣告の悲運に遭遇いたします。幸い、有力な知人らの介入で銃殺は免れます。そしてサン・マルコス大学の教育改革の動きの中で、いかにも挑発的な「非博士…」の名刺をかざして、予科講師を勤めたりしました。しかしこの活動も、反動的な新政権の出現で中断されます。弾圧の強化の果てに、大学が一時閉鎖されたのでした。

詩人はこの間の組合結成や地下活動を咎められて、またもや逮捕、拘留、拷問、投獄を経験いたします。もっとも過酷な体験は、悪名高いエル・フロントンの刑務所で「エル・シベリア」に、つまり政治犯向きに造られたコンクリート・ブロックの函に、食べ物も水もない状態で押し込められたことでした。

結局、詩人は国外追放の処分を受け、コスタリカ、メキシコ、フランスを経てマドリードに辿り着きますが、持病の結核が悪化して、近郊のサナトリウムで死亡いたします。

貴重な『ペルー現代詩抄』（30）に初めてオケンド・デ・アマーの作品を収めた編者アルベルト・ギジェンのユーモラスな評言によれば、まさしく「月と蝶を追いかける子供のように、詩の鱗粉のついた指先で嫌がらせをする、小うるさい若者たち」の一人であった詩人の人気は、近来ますます高まりつつあります。その流れに乗ずるわけではなく、私も日頃から愛読する詩人の作品を翻訳する仕事を秘かに進めてきて、この程めでたく完成いたしました。

新大陸の残酷な征服者であったり、栄華を極めたペルー副王であったりという、先祖たちの〈罪〉を一身であがなうと言いたくもなる、詩人の甚だしい逆境と惜しむべき夭折が遺していった、わずか一巻の詩集。その紹介によって、いささか大時代な物言いですけれども、私自身の生涯を締めくくるのも悪くない、と考えたりする今日この頃です。

## 恩師の先生から

### 大学時代を振り返って

木村榮一

(1966年～2012年)

一昨年、久しぶりでイスパニア学科一期生の同窓会があり、昔のクラスメートと旧交を温めた。昔話に花を咲かせているうちに大学に残る前後のことが記憶に蘇ってきた。

四年生になったある日、友人たちと一緒に鼓直先生のお宅にお邪魔して、奥様の手料理をご馳走になった時に、君ら一期生の中から一人大学に残ることになっているのだが、応募してみないかと言われた。どうしたものか迷ったが、教師になるのも面白いだろうと思って応募してみたところ、多少の紆余曲折はあったものの採用されることに決まった。

大学に残ることになったあと、林一郎先生に研究室に呼ばれ、何を専攻するんだねと尋ねられた。文学をやりたいと思っていますと答えると、「そうか、それなら十九世紀のヨーロッパ文学をしっかりと読み込むことだ。それがのちのちの財産になるから」と言われた。その言葉はぼくの以後の読書の方向を定めたといってもいい。ついで、ふと思い出したように「しかし、ケツから二番で入った君が教師になるとはなあ」とため息混じりに言われたのはおかしかった。

教師になってからは研究室が同じだったということもあって、高橋正武先生から日々薫陶を受けた。ある日、先生から三宮でご飯でも食べようかと言われた。ご馳走になっていると、「木村くん、教室で学生から質問されて、立ち往生することもあるだろうけど、決してごまかしたり、嘘をついてはいけない。一度嘘をつくとも、それがどんどん大きくなってどうしようもなくなるからね。わからないときは、わかりませんと答えて、ほかの先生や外国人の方に尋ねるといい。語学というのは、そうして少しずつ身につけていくものなんだよ」と言われた。この言葉はぼくの金科玉条になった。

その後、神戸外大で教師生活をつづけ、無事定年を迎えることができた。今思えば、上に触れた先生方をはじめ、一緒に教鞭をとった東谷先生、西川先生、ペニユエラ先生、さらには宮本先生、福寫先生、サンス先生、野村先生、成田先生などすばらしい先生方がおられたこともぼくにとってはこの上ない僥倖であった。一方、教師というのは学生から教えられるものでもある。その意味で



言えば、いい学生たちに恵まれて、楽しく授業しながら共に文学と語学を学び続けてきたと言っても過言ではない。

人生というのは運と縁に大きく左右されると言われるが、運だけで教師になったぼくは神戸外大のイスパニア学科とよほど深い縁で結ばれていたのだろうと改めて思う。

## 神戸市外大イスパニア学科の現状

野村 竜仁

1992年（平成4年）卒

イスパニア会の会報ですので、イスパニア学科の現状について、2005年の第一回イスパニア会総会から2012年の第二回総会までの出来事を中心に、ご報告したいと思います。二回の総会のあいだに、イスパニア学科は随分と様変わりしたと感じています。ご記憶の方も多いでしょうが、それぞれの総会の際には記念パーティが催され、第一回総会の際はイスパニア会の設立とともに、東谷穎人先生のご退職と、木村榮一先生の学長就任を記念するものでした。1999年から学長を務められていた東谷先生がその年に神戸市外大を去られ、木村先生が学長職に就かれて数ヶ月の時、あの会合に出席しながら、何か大きな節目を立ち会っているような感慨を得たことをおぼえています。

木村先生が学長になられて間もなく、大学は法人化という大きな節目を迎えました。心労の絶えないお立場にもかかわらず、困難な大学運営について木村先生一流の語り口で話されていたことが思い出されます。木村先生は2011年に学長職を退任され、その翌年には、イスパニア学科の教授として長年活躍されてきた西川喬先生が退職されました。お二人のご退任とご退職を記念するパーティが、イスパニア会第二回総会とともに催されたことは記憶に新しいところでしょう。

この二つの総会のあいだに、長くイスパニア学科の授業を担当されてきた染田秀藤先生、平田渡先生、セフェリーノ・プエブラ先生、池沢英一先生、山口忠志先生、長谷川信弥先生、松本健二先生も外大を去られました。そして今年三月には、イスパニア学科の教授として長年教鞭をとられてきた宮本正美先生もご退職されました。

退職される先生がいる一方で、新たにイスパニア学科の教員として着任された先生もおられました。成田瑞穂先生、川口正通先生、フアン・ロメロ・ディアス先生の三人の先生ですが、皆さん若くて優秀な方々で、心強い限りです。もちろん学科代表の福寫教隆先生、副代表のモンセラット・サンス先生は、大学のみならずさまざまな分野で引き続きご活躍です。こうした専任教員に加えて、イスパニア学科の卒業生を含む多くの先生方がそれぞれの専門性を生かして、学生に学習と研究の機会を提供しています。

諸先生方の授業に加えて、ここ数年でイスパニア学科の学生には、以前より

も多くの留学機会が提供されるようになりました。1990年、スペインのオルテガ・イ・ガセット研究財団との交流協定によってトレドへの派遣留学がはじまり、つづいてアルカラ大学への派遣留学も実施されてきましたが、二回の総会のあいだにサンティアゴ・デ・コンポステーラ大学、ラ・リオハ大学、バスク大学との交流協定が結ばれ、さらにセゴビア市における国立通信教育大学への派遣留学も実現しました。その後も先生方のご尽力によって提携先が増えつつあり、今年からはサラマンカ大学との交換留学制度もはじまりました。

昨今、世間では若者の留学離れがしばしば話題になりますが、当然のことながらイスパニア学科ではそのようなことはなく、毎年多くの学生が提携大学を含めたさまざまな土地へ留学していきます。以前は三年次あるいは四年次で留学する学生がほとんどでしたが、最近では二年次から留学する者も現れ、そのたくましさに関心させられます。留学中にあちこち旅行する学生も多く、スペインやラテンアメリカでの武勇伝を聞かせてくれるのも毎年の楽しみです。そんな学生たちも将来のことはしっかりと見据えていて、多くの者が就職活動の時期になると帰国するようです。就活の解禁時期の繰り下げが話題になりますので、学生生活の充実に資する変更となることを願っています。

留学の話の関連で、やはりここ数年のことですが、大学院を中心にスペイン語圏からの留学生が増えてきました。しかも優秀な学生が多く、いろいろと教えられることもしばしばです。日本人の学生も含めて、そうした大学院生の中から日本におけるスペイン語教育やスペイン語圏の文化の普及に貢献してくれる人材が数多く輩出されることでしょう。また前述のサラマンカ大学との協定と同じく、交換留学を含めた新たな協定の締結が検討されており、今後さらにスペイン語圏からの留学生も増えてゆくかもしれません。

二つの総会のあいだの出来事について、あれこれと思いつくままに述べましたが、数年間のことながら大きな変化であったと感じています。今後もその時代に応じたさまざまな出来事があるでしょう。イスパニア学科がより良いものとなるよう、努力していきたいと思えます。

## 海外生活

### ラテンアメリカ駐在の経験

谷 善三

1967年（昭和42年）卒

私はペルー、パナマ、アルゼンチンと合計16年間駐在員生活を経験し、それに加え出張で他の中南米、カリブの殆どの国を訪問する機会に恵まれました。駐在した3ヶ国では、電気製品の販売会社で主に営業を担当していましたが、私にとって初めての外国がペルーでした。今の多くの外大生は学生時代にスペイン語圏の国に留学や旅行をしていて直接スペイン語に触れる機会が多くあり、つくづくうらやましく思います。

ペルーでは赴任直後から相手の話しをおよそ聞き取れることは出来ても、自分の言いたいことを十分に伝えることができず、悔しい思いを何回もしてそれがバネになり少しずつ会話力が上達してきました。スペイン語の通訳をする機会も多くありました。数名での打ち合わせなどは特に問題はありませんでしたが、本社のトップクラスが出張で来られると、会議やパーティで大勢を前にしてその幹部の挨拶を通訳することになるので、想定的话题を考え随分スペイン語の準備をしました。

社員や取引先には日本語を解する日系人がいて、赴任当初は言葉で随分助けられました。現地社員と一緒に販売店などを商談に訪れる時、彼らの中での話すスピードや内容についていけないことが多く情けない思いをしていました。しかし道を覚えて車を運転して一人で訪問できるようになってからは、相手は私が理解できるような表現やスピードにしてくれますし、理解できない点は、直ぐ聞きなおすことが出来たため、商談が一人で出来るようになり自信がつかってきました。親しくなると会話にペルー独特の俗語が多くなりますし、私が俗語を使うと「お前もペルー人になったな」と喜ばれるのです。しかしこれらの俗語は大方が品の良くないもので、相手により使い分けねばならないことは言うまでもありません。

日常のニュースはラジオ、TVや新聞で入手していましたが、よく分からない背景や内容は幹部社員に解説してもらいました。中南米の人は実に噂話のおしゃべりが好きですので、ロコミで教えてもらうことも多かったと思います。現地の方との付き合いでは、人間関係を大変大事にしますので、親しくなる為の一つの有効な手段は食事を一緒にすることです。特に自分の家に招いて日本食など

で接待することは大変喜ばれました。この点妻には苦勞を掛けましたが相手も夫婦で来られるので、夫婦でもてなしをすることは大切なことでした。

中南米で感心したことの一つは家族や親族それに AMIGO を大切にすることで、週末や、誰かの誕生日には、皆で集まって賑やかにおしゃべりで過ごします。時には輪になって踊ったり、小話しをして笑いこけたりして楽しめます。

ここで一つ、ペルーの大地震に遭った時のことを紹介したいと思います。赴任して3年目のある日の午前中、会社の事務所に居る時、突然大きく建物が揺れました。私は地震だ！と直ぐ机の下にもぐり我が身を守りました。揺れが収まり机の下から顔を出すと殆どの女子社員が男性社員に抱きかかえられるようにしてオイオイ泣いています。ペルーではこのような態度をとるのが普通だそうで、私は先ず我が身の安全を考えた行動をしたことを恥ずかしく思いましたが、さあそれからが大変です。会社の前の2車線の大通りは自動車が勝手な方向に動いて大混乱です。多くの普通の住民が近くの商店から商品を奪って走っています。町中がパニックになっています。ついには商店を狙った略奪があちこちで起こり、政府は非常事態宣言を出して軍隊が出動して騒ぎを治めました。地震そのものの被害より2次的な被害の方が大きかったのです。

ところで子供の教育ですが、中南米の殆どの国では首都に日本人学校があり、義務教育の間は日本から派遣されてきた先生が日本の教科書を使って授業をしてくれますので、大きな問題はなく、私の場合は子供たちから「パナマ日本人学校時代が一番良かった！」とされています。小規模な学校ですから小1から中3までが顔見知りですので、日本のような「いじめ」は無かったように思います。日本とは遠く離れている環境の中なので特に仲が良かったのではないのでしょうか。

残念なことは、永年スペイン語圏に住んでいたのに、商売上の付き合いや、本社への報告や、日本からの主張者のアテンドで忙殺され、文化的なことにまで余り踏み込む余裕がなかったことでしたが、それでも時々家族で地方や近隣の国に小旅行が出来ました。それに日本からの出張者をペルーではインカの遺跡、博物館、パナマでは運河、アルゼンチンではタンゴショー等に度々案内しましたので、これらの文化については案内の際の説明のため、随分勉強をしました。

中南米の素晴らしい大自然、珍しい食べ物、それに人懐っこい土地の人々と接することができたことは私にとって大きな財産になっています。今でも駐在した国で特に親しかった人達とはメールでの交信をしています。これらの貴重な経験をすることができたのは神戸外大でイスパニア語を勉強してきたからだと思っています。

## 海外便り

### スペインの古都トレドに住んで

岡崎由紀子

1992年（平成4年）卒

スペインに来てから、おおよそ24年の年月が過ぎようとしている。そのほとんどの年月をマドリードの南西にある古都トレドですごした。きっかけは神戸市外大との提携校であるオルテガ国際教育センターにおける秋期コースへの参加であった。このセンターは、トレド大聖堂に近い、石畳の狭い路地の突き当たりであった。ここに来た当初は昼食を用意しながら歌う女性の声に聞き惚れたり、大きな声で激しく言い合いをするスペイン人たちの会話にまるで自分が怒られているような気がして、怖くてその前を通れなかったりした。トレドで知り合ったスペイン人から数字の入ったジョークを何度も聞かされ、言う度にその数字が違うので訂正したら、そんな数字なんて全く重要ではないのにと驚いた顔で見られたこともあった。通りを歩けば子供たちに、アチョー、アチョーと空手のまねをされるので、私もつい調子にのって真似をすると、子供たちが怖がって逃げていったこともあった。

やがて、トレドの国際教育センターで職を得て、この町で働くことになったが、その19年の間に数え切れないほどの多くのカルチャーショックを経験した。例えば、「ありがとう」と言いすぎては卑屈にひびくと言われたり、自分のせいだと簡単に認めてはいけないと指摘されたりする。熱があっても仕事に出ていくと「帰りなさい」と言われる。ただそれは、熱が出て、かわいそうだという理由ではなく、風邪が人にうつるといけないからだというのが本当の理由だった。それでも片付けなければならない用事があるので出勤したら「仕事中毒」と言われ、変人扱いをされたこともある。日本人の感覚ではとても計れない「スペインの常識」を実感させられた。

ときどきトレドに留学した頃のことを思い出す。オルテガ国際センターでの勉強はとても厳しく、特に「スペイン20世紀文学」の授業では、一週間に一冊、小説を課題図書として読んで、その感想文を月曜日に提出せねばならなかった。毎週日曜の夜はクラスの一室で、一所懸命小説を読み、スペイン語で作文を書いたものだった。ときには勉強は深夜にも及び、あまりにつらくて涙がこみ上げることもあったが、今ではいい思い出として心に残っている。そのお

かげでスペイン語の力はあるが、まさか自分がそこで働くことになるとは夢にも思わなかった。最初は、1994年に夏季コースだけ学生コーディネーターとして雇われた。しかし、当時は「コーディネーター」という仕事が存在しなかったため、どんな仕事をするのか皆目見当がつかず、人に尋ねてもよくわからなかった。当然、オフィスさえもなかった。現在では余裕をもってコーディネーターの仕事をこなしているが、余った時間を利用して、4年前から Service Learning on Immigration という授業を週一回受け持っている。これは私自身興味を持ってきたスペインの移民について講義で、教えている生徒には週一回の授業と週3時間ほど、移民を援助する地域NPOや現地の小学校で実習をしてもらっている。

留学してくる学生に対しては、ただ単に授業をうけ、週末には旅行し、いろんな思い出を作るだけではもったいない、と言っている。地域社会に参加し、そこに溶け込むことも、スペイン語習得のためには必要なことで、さらには自分を成長させる大切な要素だと私は思っている。だから、自分自身もいろいろなボランティア活動を計画し、参加している。神戸市外大からの留学生には、この国際センターで日本語を教えてもらったり、州立図書館で子供たちのために英語、スペイン語、日本語で童話や昔話などを題材にした小劇を演じてもらったりしている。さらには、地元の小学校で日本についての紹介をお願いすることもある。最初その話を学生にすると、物おじしたり気後れしたりするが、最後は引き受けてくれる。学生たちは、日本についての小さな講演が終わると、無事に終わったという達成感とやりとげたという高揚感が混じった、誇らしげな表情を見せる。それを演台から離れたカーテンの間から垣間見るのが私の密かな喜びとなっている。これは、地域の子供たちが異文化にふれる最高の機会でもある。

私はこの仕事がとても好きだ。その理由の一つは神戸市外大からの学生たちがたくましく成長していく過程を見ることができるからだ。スペインに来たばかりの学生は、新しい生活への期待と不安でいっぱいになっている。学校が始まると、厳しい授業と、大量の宿題にへこたれそうになり、積極的に意見を言うアメリカ人学生らに圧倒され、自信を失うことが少なくない。しかし、時間が経つにつれて、持ち前の努力で困難を克服していき、やがて、のびのびしたその態度は他国から来る学生らの羨望の的となり、人気者となる。成績も素晴らしく伸びていく。終業式に一番盛大な拍手を浴びるのは外大生と言っても過言ではない。私はそんな生真面目な学生たちに、真面目な顔で冗談を言って相手を戸惑わせている。あるいは、コーディネーターとしてよほどのことがない

限りスペイン語でしか話さない。こんな態度で接する私は、ひょっとすると外大生からは「鬼」と思われているかもしれない。しかし、これは私の彼らに対する深い愛情の鞭であることを強調しておきたい。

現在はインターネットという語学を学ぶのにとっても便利なツールがあるが、私が外大生の頃は、図書館にラ・ルースの西西辞書がないと、その不平を聞いてくれた先生がわざわざ船便で3ヶ月もかけて取り寄せてくれたものだ。時代が大きく変わって、ほしい資料は瞬時に手に入れることができるようになった。しかし、神戸市外大の学生には、語学だけではなく、留学するしないにかかわらず、どこにいても見聞を広め、実践に裏付けられた知識をしっかりと増やしていけるように切磋琢磨してもらいたいと思う。神戸には外国人労働者の子供たちに日本語を教えるボランティア団体がある。そういうところへ行けば、外大で習っている言語を練習することができると同時に、彼らの日本語学習を助けることもできる。

トレドは、天候、時間帯、四季によって、その姿を変える。しかし、「中世で歩みを止めた」と言われるこの歴史の街は、変わらぬ多くのものを持っている。このような古都で自分の好きな仕事ができるのも、外大で教えていただいた恩師の方々のおかげであると思っている。感謝の念につきない。私はこれからもひとりの教育者として、コーディネーターとして留学生の教育に貢献していきたいと願っている。

来年はエル・グレコ死後 400 年祭がトレドで開催される。この機会にトレドに来られることがあったら、ぜひオルテガ国際教育センターに足を運んでいただきたい。学生寮と教室と最新のコンピュータ室があるこのオルテガ国際教育センターは、16 世紀に造られたサン・フアン・デ・ラ・ペニテンシア修道院の中にある。タホ川をはさんだ対岸の丘からはトレドの旧市街を一望できるが、その風景は多くの画家によって美しい絵画となっている。それらの風景画の中に、この由緒ある修道院がひっそりと描かれている。



## 卒業してから

### 卒業してからのその後

柴野元秀

1970年（昭和45年）卒

昭和45年3月、まだ大学紛争に揺れている外大を卒業して早や44年近くになります。4年生になった春の桜が満開の最初の授業の日に登校したら学校は封鎖されていました。ヘルメットの全共闘の学生が会館の屋上から顔をのぞかせていました。その後の数か月、機動隊が入ったり、校内のあちこちで議論やもみ合いがあったり激しく熱い日々が続きました。なぜかあのむんむんとした熱気が懐かしく思い出されます。時は高度成長のほぼ頂点の頃でした。高度成長のひとつの象徴である大阪万博の初日が外大の卒業式の日でした。

就職したのは総合商社である伊藤忠商事で東京勤務でした。猛烈社員を地で行って毎晩深夜まで奮闘する日が1年続いたところで2年目にメキシコ研修生を拝命しました。日本—メキシコの政府間で100人ずつの留学生を毎年交換しようとのビッグプロジェクトがまとまり日墨交換留学生第1期生として参加することになりました。企業から50人、学生から50人、日航のジャンボ機を特別チャーターしての渡航となりました。母校外大のイスパニア学科の後輩も学生として7人も参加していました。激務の社会人から一転して給料をもらって学生に戻るなど夢のような生活で、メキシコシティの青春を満喫しました。

2度目の海外勤務は中米のパナマで5年半暮らしました。パナマをベースに中米、カリブ海諸国を巡回するという日々を過ごしました。パナマや中南米でも外大の同窓生が多数活躍していたのは嬉しいことでした。駐在中に中米ではニカラグア革命、エルサルバドルの日本人誘拐事件が起きて当時の大きな話題になりました。

3度目の駐在はシリアのダマスカスに4年半、4度目は台北に3年とラテン、アラブ、アジアとそれぞれ異なる文化圏での海外経験は非常に貴重なものでした。シリアでは当時も何度か危ない目にあいましたが最近の悲惨なニュースを目にするたびに胸がつぶれます。

取引先の医療機器メーカーの川本産業に移籍して約10年間は商品の生産、仕入れ、輸入、海外事業に関わりました。中国や欧州の提携工場との折衝のため業務上、中国語、ドイツ語が必要なので何とか日常会話ができる程度はと独学で勉

強し、一応検定の2級までは取得しました。因みに最近読んだある本で語学上達に効果があるのは、音読、シャドウイング、それに検定試験を受けることとあり、なるほどもっと若い頃に聞いていたらと思った次第です。実は現在国家試験である「通訳案内士」資格に挑戦中です。取りあえず英語で取得し、その後スペイン語でと、東京オリンピックに間に合わせるようにと歳を省みず夢のようなことを考えているのですが挑戦することは少なくとも老化防止には少し効果があるのではないかと思っています。

この4月から、住んでいる生駒市鹿ノ台の自治連合会の会長職を引き受けてしまいあれこれ公務(?)に奔走しています。8000人、2800世帯のちょっとしたひとつの街の世話役ですが、行政との折衝や諸行事、イベント、会議、犬のけんかまでいろいろとカバー範囲は幅広く、週3回くらいはひっぱり出されていますが何事も勉強と受け止めて励んでいます。

同時に出身会社の伊藤忠商事の社友会の事務局長代行を拝命し毎週1-2回梅田の大阪本社に通っています。

昭和41年にイスパニア学科に入学したのは約40人だったと思いますが昭和45年に一緒に卒業したのは名簿によると22人でした。平和で豊かで激動の時代でもあったことにあらためて思い至ります。卒業以来、みんなで集まるということはあまりなかったと思いますが、先般ひょんなことから一度イスパニア学科ミニ同窓会をやってみようということになりました。数人でも集まればということでしたが何と11名が集合しました。三宮のとある居酒屋で卒業以来という仲間も含め懐かしい顔ぶれが揃いました。40年以上のタイムトンネルをくぐり抜け思い出話に花が咲きました。恩師の高橋先生、木村先生、林先生、鼓先生、一色先生、ペニユエラ先生のこと、語劇祭での合宿練習のこと、学園紛争のこと、当日は欠席でしたがいつもダンディで話題を振りまいていた某氏のこと、話のたねは尽きずあつという間に2時間半が経過してしまいました。因みに我々の在学中の語劇祭のイスパニア学科の出し物は1年生の時が「Tres Sombreros de Copa」(3つのシルクハット)、2年生の時が「La Dama del Alba」(暁にくる女)、3年生の時が「El Landó de Seis Caballos」(六頭だての四輪馬車)であったことが某氏の記憶により判明しました。最後に1人1分間という約束の近況報告がそれぞれ5分間以上になったのは自然なことでした。みなそれぞれがかっちりとそれぞれの人生を生きているということを知り心底嬉しく感じました。2度と帰らぬ青春の時を数年間スペイン語学習という共通項を持ち同じ教室で過ごしたという思い出はかけがえのないものであると痛いほど実感して名残つきなおひらきの時を迎えました。

## 会員の近況報告

伊藤 嘉太郎 1966年（昭和41年）卒

ラテンアメリカ関連の仕事に30数年携わった経験から、5年前より京都外大でビジネス・スペイン語の講座を担当しています。語学力の維持向上と世の中の動きを追わねばならず、頭と心身の活性化に役立っています。また、2年半前から西宮国際交流協会で、外大の元ラテンアメリカ研究会のOBが集まって月1回騎士道小説を原典（中世スペイン語）で読む会を催しています。みんなセルバンテスの意図に反して騎士道小説にはまっています。

杉井 皓一 1966年（昭和41年）卒

商社の海外駐在員として台北、サンパウロ、上海、ボストンと足掛け12年間に海外で過ごしましたが、定年後はボケ防止と高い国民健康保険料回避のため小さな商社の顧問として中国と中南米間の貿易の仲介をしています。台北、上海駐在で覚えた中国語の他にポルトガル語、スペイン語、英語でメール発信をしています。健康維持のためにウォーキングの他に百名山完登を目指していますが、まだ30座程残っており何とか75歳までに達成したいと思っています。今年の夏は北海道のトムラウシ山への単独山行でヒグマに遭遇し肝を潰しました。級友の伊藤明君と時々一緒に登っています。



伊藤 明 1966年（昭和41年）卒

完全にスローライフ入りして早や6年。最初の2年ほどは京都の大学で日本の近代史を学んだりしましたが、今は市のテニスクラブに入って週3回ダブルゲームを楽しんでいます。他には前の会社の山好き仲間たちと作った登山クラブ（百山会）ではほぼ毎月山行に出かけています。今年で16年目となり目標の百山制覇まであと10山となり、この達成が楽しみです。また卓球部OBG会の世話役をしていた関係で外大にも何度も出向く機会に恵まれ、途中車窓から六甲の山並みを見ながら往時を懐かしんでいます。

中村 俊昭 1966年（昭和41年）卒

久方振りに一筆啓上。武庫山の裾野を後にして47年余り、あの桜坂を登り始めて早半世紀と想うと感慨深いものがあります。メキシコで定年を迎え会社には少々無理を通して、'02年9月に退社、その後播州赤穂と鹿児島を車で十数回往復、最近では帰省の足も遠退きつつあり赤穂で元気に平々凡々に過ごしています。定年後は故郷でと思っただけでしたが子供や孫たちも東の方に居て住むのに便利な赤穂の住人になっております。2013/11/10

津田 哲男 1966年（昭和41年）卒

孔子の「七十にして従身」の古希を迎え、待望の東京都シルバーパスをget、心の欲する所に従って、東京再発見の好機とばかり都心にアクセス、日々「キョウイク」と「キョウヨウ」(^\_^\*)に勤しみ、アクティブシニアの仲間入りです。この身何とか東京オリンピックまでモタセタイなあ(^0^)の心境です。

工藤 活義 1967年（昭和42年）卒

私の住む静岡県西部は自動車・楽器等の工業地帯で1990年代は多数の中南米人が就業していましたので、日本語教室をボランティアで15年間開催しました。退職後、ポルトガル語、スペイン語での各種通訳（警察、弁護士、病院等）及び教育委員会の嘱託として地域の小・中学校の外国人生徒指導員をしていました。現在では、法テラスで法律相談の弁護士通訳（スペイン語、ポルトガル語）を不定期で行っていて、趣味では国際交流協会・ESSサークルへの参加などです。

荒川 弘道 1967年（昭和42年）卒

（株）クラレを65歳で定年退職して以来、青春時代の夢（大学を一年間休学し画家への道を模索）を再確認すべくキャンパスに。近隣の市展に出品を続けるものの実力は入選（たまに入賞）する程度で特別非凡でもない能力を再認識。現在、絵画制作は趣味の範囲に留まっている。最近の作品はホームページ（<http://phbs.jimdo.com>）に掲載中です。健康面では腰部脊柱管狭窄症を中心として三病息災です。

中野 利勝 1967年（昭和42年）卒

16Hの皆様ご無沙汰しております。中野利勝です。神戸から千葉に移って早43年、四街道市に住みほぼ20年になります。私にとって、36歳から41歳までオーストラリアに駐在したことが大きなエポックだったと思います。今は、自宅の小さな庭の植木、垣根、隣の緑地の剪定、週末は近くのテニスクラブで汗を流し、毎日が日曜日なのにいそがしく過ごしております。神戸には年1-2回テニス部のOB/OG会にあわせ、両親の墓参りに帰神します。

池沢 英一 1969年（昭和44年）卒

私は今故郷の滋賀長浜市の山深い小村に住んでいます。姉川の古戦場に近く、自宅の窓からは姉川の支流や伊吹山が見えます。よく帰省すると水のうまさど空気の違いに驚いたものでした。ここで私は野菜や花を家の前の小さな菜園で完全有機栽培をして楽しんでいます。退職後長野の小諸市でユニークな農法を指導している所があり、1年ほど通って勉強した成果かどうか、道行く人から賞賛の言葉をもらいます。今は来年の改善策を練っているところです。

和久田 好男 1974年（昭和49年）卒

年周りでしょうか、この1年に家族3人の不幸が続き、家内はストレスで弱った母親の看病で久留米の実家に帰ったまま、私が月2回神戸と久留米を往復しています。神戸に帰っても夏に神戸大に残っていた西島章次君をブラジルでの交通事故死で失い、会社の親しい先輩2人が膵臓ガンと肝ガンで亡くなり、

先日は蒲郡の友人も社長になってたった 3 ヶ月で心不全で死んでしまった。私自身も糖尿病で主治医に禁酒を厳命されています。今日門戸厄神に行ってお払いをうけてきました。あさってからまた久留米にいきますので。皆さんの健康をお祈りします。

吉川 正晃 1977年（昭和52年）卒

卒業して株式会社クボタに入社。海外事業、情報関連事業など、当時の新規事業の立ち上げや子会社の経営に携わって参りました。

2005年にクボタが、私の経営する子会社を売却することになり、クボタを退職し、子会社に残り売却先を探し、従業員の雇用を守るという仕事は、人生最大の仕事だったと思います。

ひと段落がつき、2013年4月に公募採用で大阪市役所に勤務する事になりました。35年ぶりの関西です。今回の仕事は、「世界に繋がる起業家の街」を造ることです。またまた、新事業です。

「生涯現役」。今、自分に言い聞かせている言葉です。同窓会の皆さん、私は仕事を創るのが得意です(笑)。海外関連の仕事はいくらでもあります。生涯現役を目指す方、ご連絡下さい。

大阪市都市計画局 理事



形岡 忍 1977年（昭和52年）卒

外国に憧れて神戸外大に入学。夢がかない海外勤務を果たすも、まさかアングスのこんな片田舎に来ることになるとは。とりあえず宿舎としたビンテージもののホテルの脇を、明け方ともなると荷馬車が行き交い、蹄鉄の音がうるさ

くて寝てられない。

周囲から、「眠れない？早起きすれば」と逸らかされながらも、成る程ものは考えよう、と妙に感心したのが 30 数年前。それが同じ処で定年を迎えるようになるとは。その間に世界が変わり日本も変わりアンデスの片田舎が変わるも、気持ちは若いまま。

皆さん、これからは発展途上国も狙い目ですよ。若い国は元気がありますよ。と申し上げて、コロンビアよりの挨拶とさせていただきます。

青木 優 1978 年（昭和 53 年）卒

卒業後、神戸市に本社を置く東亜医用電子㈱（現シスメックス㈱）に就職以来、現在に至っております。海外と縁のある部署での勤務はかなりありますが、イスパニア語圏との関わりが無く、残念ながらイスパニア語はすっかり錆ついてしまいました。今は二人の子供の結婚を夢見ながら、おじいちゃんと呼ばれる日が来るのを楽しみにしています。



虎岩 佐知子 1983 年（昭和 58 年）卒

バルセロナに来て、はや 28 年が経ちました。現在こちらで通訳、翻訳並びにコーディネータ、アテンド業をしております。仕事を通じて色々な方との出会いがあります。それが、自分の人生にとって大きな糧となっています。バルセロナは世界中の人から注目を浴びる街になりました。今年の日西交流 400 周年、また神戸市とバルセロナ市の姉妹都市提携の 20 周年という記念すべき年です。是非皆さんも一度、バルセロナにお越しになって下さい。

米田 眞澄（旧姓：安井） 1984年（昭和59年）卒

2005年4月より神戸女学院大学文学部総合文化学科に勤務し、専門である国際法をはじめ、法律学概論、家族法、ジェンダー法学などの法律学に関連する科目を担当しています。イスパニア語からは離れてしまっていますが、たまに中南米の裁判所判例や文献などでイスパニア語に触れる機会もあります。2014年度から1年間サバティカル・リープを取得し、充電します。しばし、教育から離れて、研究に没頭させていただきます。



野村 竜仁 1992年（平成4年）卒

現在、母校の神戸市外国語大学に戻って教えております。バブル期に学生時代を送り、私自身の生活は華やかさとは縁遠いものでしたが、その頃の思い出などを今の学生に語って、あきれられることもしばしばです。立派になられた同世代の方々の話を聞くにつけ、我が身を振り返っております。ご指導いただいた先生方のご恩を忘れず、少しでも母校にご恩返しができるように、これからも精進したいと思います。



種戸 美和（旧姓：高橋）

1996年（平成8年）卒／1998年（平成10年）修士課程修了

卒業後、いくつものご縁に恵まれ、現在はカスタムメイド靴の製作と革小物の教室を開いています。出来るだけ環境に負担をかけない製法で鞣した革や材料を使い、快適に歩くためのサポート力とデザイン性のバランスを心がけて、靴を作っています。

ひとりコツコツ製作に向き合うことも、教室に通ってくださる方々と賑やかな雰囲気の中で手を動かすこともともに楽しく、まだまだ教わることの多い日々を過ごしています。

[https://www.facebook.com/lagotane?ref=br\\_rs](https://www.facebook.com/lagotane?ref=br_rs)

大塚 恵子（旧姓：久保） 1998年（平成10年）卒

卒業後、メーカー勤務、スペイン語新聞勤務を経て、編集プロダクションに入り、現在は子育てをしながら、フリーの編集者として働いています。西洋美術関連の書籍を編集することが多いせいか、卒業時には「どうせ無用の長物になるのだろう」と思っていたスペイン語は、意外なことに、結構、役立ったりします。東京在住。今年の3月には、女の子が生まれ、一男二女の母親になりました。

松田 侑子 森川 香織

2005年（平成17年）卒／2013年（平成25年）博士課程修了

先日、同期の友人の結婚式に参加してきました。少人数クラスで編成されていましたが、就職後は皆散り散りになり、ここ何年も会っていないクラスメイトも参列していました。とても懐かしかったです。花嫁も美しく、結婚式も大いに盛り上がり、またテーブルの会談では、学生時代のスペイン語授業の話題で盛り上がりました。予習の苦しさはいつの世も変わらぬものですね。卒業以来、会っていない友人と会う機会をまたつくりたいです。

大澤 玄 2006年（平成18年）卒

スペインが外洋に飛び出した大航海時代は飛行機がなく、海をわたるには船しかありませんでした。海の果てを目指し、多くの人々が航海の発展に尽くし

できました。現在では航空機が長距離移動の主な手段となり、その運航を支える様々な人間がいて、大航海時代の人間と同じく、日々航空の発展に尽くしています。外大を卒業してから7年。様々な経緯を経て現在、私は航空管制官となるべく航空保安大学校で基礎研修に励んでいます。

三宅 陽子

2006年（平成18年）卒／2013年（平成25年）博士課程修了

私は神戸外大で学んだ後、現在は関西の複数の大学でスペイン語講師をしています。学生達はスペイン語圏に興味がある、中南米出身の友人がいるなど様々な動機で履修していて、上達していく過程を見る事が出来た時はとてもやり甲斐を感じます。私自身、大学時代の旅行や留学を通して言語を学ぶことの面白さや、習慣や気質と言葉の関係に気づいたので、これからスペイン語を学ぶ人たちに私なりにこの奥深さをもっと伝えていきたいと思っています。

下吉 あゆみ

2008年（平成20年）卒／2010年（平成22年）修士課程修了

バルセロナで言語学を勉強中です。今は短期でマンチェスターに来ています。目標に向かってずいぶん回り道をしてきましたが、三十までには放浪癖を治したいです。

竹本 拓也

2008年（平成20年）卒／2010年（平成22年）修士課程修了

イスパニア学科の同級生に数年遅れつつも、なんとか社会人4年目に入りました。大自然に囲まれた兵庫・但馬地方で新聞記者をしています。警察で言う「駐在さん」のような存在で、夜はおかずを持ち寄っているろりを囲んだり、近くのおばあちゃんが朝食を届けてくれたり…。日本海の海の幸と但馬ビーフ、たくさん温泉に囲まれているせいか、前任地よりも多くの大学仲間が遊びに来てくれます。田舎の良さ、しみじみ感じる日々です。

西條 万里那

2008年（平成20年）卒/2010年（平成22年）修士課程修了

修士課程在籍中に中学・高校教育職員免許状（英語・スペイン語）を取得。神戸市内の小学校、高校、大学受験予備校で講師として勤務。修士課程修了後、博士課程に進学。2012年9月からスペイン、アルカラ大学に半年間、日本語講師として出張。現在、非常勤講師として大学に勤務しながら、博士論文を執筆中。2014年2月からは東京で勤務予定。

岩浅 康史 2008年（平成20年）卒

大学卒業後、私は㈱工進という京都のポンプメーカーで海外営業をしています。アジア・インド担当を数年経験した後、現在は、以前からの希望だった中南米を担当し、メキシコ駐在も経験させてもらいました。日本と中南米ではまったく違う時間が流れていて、仕事となると大変な事も多いですが、スペイン語を使って現地の方と仕事をする事はやはり楽しいものです。出張も多く忙しいですが、充実した毎日を過ごしています。



岩浅 明日香（旧姓：三宅） 2008年（平成20年）卒

メキシコ第2の都市グアダハラで、1歳になる娘と生活しています。気候も良く、人も温かい良い街です。アジア食品の輸入卸会社に勤めていますが、現在日本人スタッフを募集しています。日本語・英語・スペイン語が話せて基本のPCスキルがあれば、経験は問いません。詳しくは下のアドレスまでご一報ください。私に対応しますので日本語でOKです。

Comercial Toyo S.A. de C.V 岩浅宛て  
[info@toyofoods.com.mx](mailto:info@toyofoods.com.mx)

中川原 拓海 2008年（平成20年）卒

卒業後、在外公館派遣員制度で在メキシコ日本大使館に2年勤務しました。その間、結婚して2児の父です。現在、メキシコのチャピngo自治大学地方農村開発学修士課程（チアパス州サンクリストバル・デ・ラス・カサス）に在籍しており、来年7月頃に修了見込です。チアパス州ソコヌスコ地方海岸マングローブ域漁業の衰退と社会政策の関係が研究テーマです。フィールドがすぐそこにあるメキシコでの研究生活は常に刺激的です。旅行や研究等でチアパスに来る予定がある方は遠慮なく連絡ください。

[nakagawaratakumi@hotmail.com](mailto:nakagawaratakumi@hotmail.com) / [nakagawaratakumi@gmail.com](mailto:nakagawaratakumi@gmail.com)

坂口 浩美（旧姓：堀） 2009年（平成21年）卒

2012年春に、同学科で後輩の坂口裕祐さんと結婚しました。語学の共通点もあり、新婚旅行の行先は、ペルー・ボリビアと、すんなり決まりました。旅先では英語とスペイン語を駆使して、充実した時間を過ごすことができたのは、学生時代の勉学の賜物と思います。また南米に行きたいと、ポルトガル語を勉強し始めたところです。



徳本 ちさき 2009年（平成21年）卒

神戸市内の高校に勤めています。授業中にスペイン語を披露したり、中南米での経験を話したりすると、生徒たちはとても喜んでくれます。まだまだ失敗も多い毎日ですが、素直で一生懸命な生徒たちに助けられて楽しい日々を送っています。また、外大で色々な経験をさせていただいたことが自分の糧になっていることを日々しみじみと実感しています。

金津 昌弘 2009年（平成21年）卒

卒業後、人材・広告系の企業に入社し、広島に配属。2012年には中国、深セン市に1年間駐在。現在は東京在住。学部時代に（何年もかけて！）磨いたスペイン語や英語に加え、初級レベルではあるものの、中国語も運用しつつ業務をこなしております。転勤の多い生活ですが、さまざまな環境にうまく適応し、楽しんでいます。

松山 千恵 2011年（平成23年）卒

兵庫県内で中学校教員として働いています。私の出身校とは異なり、やんちゃな生徒が多いため苦勞もありますが、充実した日々を過ごしています。外大での楽しかった学生生活をいまでもよく思い出します。当時もっと熱心に読書や勉強に励んでいればと思い、いまさらながら改めてスペイン語の学習をはじめました。またいつか外大の先生方の授業を受けたいです。

金田 祐実 2013年（平成25年）卒

私は現在、静岡銀行で個人のお客様の資産運用担当で営業をしています。この職業を選んだ時点で、スペイン語に触れる機会はないだろうと思っていましたが、中南米出身の方も多く来店され、最近では私宛に来店して下さるようにもなりました。まだまだ社会人として半人前ですが、外大イスパ卒として誇りを持って頑張りたいと思います。

谷口 里沙 2013年（平成25年）卒

現在、私は自動車部品メーカーの社内・海外子会社の教育・研修を担当する部署で、主に海外からの研修生の受け入れを担当しています。現在、当社では生産の拠点を東南アジアなどの海外へ移しており、高い品質を維持するには日本の技術を海外へ移転することが重要課題となっているため、私の業務は今後大事な役割を果たします。時々メキシコからも研修生が来ることもあるため、まだ機会は少ないですが外大で学んだスペイン語を生かしています。

神戸外大イスパニア会 役員名簿

2012年06月02日

2013年06月22日暫定

会 長	西川 喬	(18回)	昭和44年	(1969年)	3月卒業
副会長	吉川 俊介	(16回)	昭和42年	(1967年)	3月卒業
副会長	佐藤 孝三	(20回)	昭和46年	(1971年)	3月卒業
理事長	竹谷 和之	(28回)	昭和54年	(1979年)	3月卒業
常任理事	田尻 陽一	(15回)	昭和41年	(1966年)	3月卒業
	坂根 博	(21回)	昭和47年	(1972年)	3月卒業
	安藤 典子	(26回)	昭和52年	(1977年)	3月卒業
	冨尾 圭子	(28回)	昭和54年	(1979年)	3月卒業
	小野 賢一	(30回)	昭和56年	(1981年)	3月卒業
	野村 竜仁	(41回)	平成 4年	(1992年)	3月卒業
	成田 瑞穂	(45回)	平成 8年	(1996年)	3月卒業
	飯島 祐子	(47回)	平成10年	(1998年)	3月卒業
理 事	谷 善三	(16回)	昭和42年	(1967年)	3月卒業
	東谷 陽子	(17回)	昭和43年	(1968年)	3月卒業
	池沢 英一	(18回)	昭和44年	(1969年)	3月卒業
	増野 俊則	(22回)	昭和48年	(1973年)	3月卒業
	和久田 好男	(23回)	昭和49年	(1974年)	3月卒業
	田岡 敬造	(25回)	昭和51年	(1976年)	3月卒業
	松久恵美子	(31回)	昭和57年	(1982年)	3月卒業
	塩川 雅美	(32回)	昭和58年	(1983年)	3月卒業
	石田 敦子	(33回)	昭和59年	(1984年)	3月卒業
	吉田 葉子	(42回)	平成 5年	(1993年)	3月卒業
	吉田 昌洪	(43回)	平成 6年	(1994年)	3月卒業
	伊藤 かお里	(44回)	平成 7年	(1995年)	3月卒業
	中川 智子	(50回)	平成13年	(2001年)	3月卒業
	岡部 祥子	(51回)	平成14年	(2002年)	3月卒業
	長谷川くにこ	(52回)	平成15年	(2003年)	3月卒業

森田 智香子 (53回) 平成16年(2004年) 3月卒業  
濱田 香里 (54回) 平成17年(2005年) 3月卒業  
赤澤 理絵 (56回) 平成19年(2007年) 3月卒業

監 事 松田 侑子 (53回) 平成16年(2004年) 3月卒業  
森川 香織 (53回) 平成16年(2004年) 3月卒業



## 「会員の近況報告」に関する投稿規定

1. できるだけ、「ワード」で書いた原稿とすること。
2. 原則として、200字程度とする。
3. メール添付で送付のこと。メールは、同学年の理事またはそれ以外の理事に送付すること。
4. 写真を提供することができる。ただし、本人が写っているもので、1枚限りとする。なお、写真の掲載の可否およびそのサイズに関しては編集委員会に一任するものとする。
5. メールアドレスは原則として掲載しない。しかし、本人が希望すれば、掲載することができるので、その旨を明記すること。

## 編集後記

「イスパニア会」が発足してから約13年、その間何度か会報作成の話が持ち上がり、常任理事会および理事会で審議を繰り返した結果、ようやくここに第1号の会報が出来上がりました。

心のこもった原稿をお寄せいただいた皆様には、ことのほか深謝の意を表させていただきます。皆様の原稿を拝読させていただき、あらためてイスパニア学科の足跡をたどることができ、これについても感謝しています。

本会報が同窓に話の輪を広げ、絆をより一層強めるよすがとなれば幸いです。

編集に当たっては、西川先生を中心に4名の編集委員が、定期的に会合を持って進めてまいりました。一生懸命に尽力したつもりですが、不手際も多々あろうかと思えます。ご寛容のほどお願い申し上げます。

「イスパニア会」のさらなる発展を祈念して・・・

会報編集委員

西川 喬

谷 善三

伊藤 かお里

田岡 敬造 (記)

イスパニア会 会報 第1号

---

---

神戸市外国語大学イスパニア学科  
イスパニア会

会報 第1号  
2014年4月1日 発行  
発行者 会長 西川 喬

---